

中国軍用無人航空機 の現状と今後の見積り

笹川平和財団

日米・安全保障研究ユニット総括・交流グループ長
兼主任研究員

河 上 康 博

1. 中国の主要軍用無人航空機の装備の現状

- 主要軍用無人航空機の性能等
- 実戦運用実績（対テロ作戦を中心）

2. 中国の主要軍用無人航空機による日本周辺での活動の現状

- 中国軍用無人航空機の特異飛行の年度別推移（2021-2025年度）
- 地域別活動の現状（東シナ海、太平洋、日本海）

3. 日本の対応

- 日本の現対応状況と課題
- 日本の今後の対応

4. まとめ

- 中国の軍用無人航空機の現状と分析
- 日本の対応と提言



1. 中国の主要軍用無人航空機の装備の現状

※ 防衛省（統合幕僚監部）・防衛研究所の公開資料、SIPRI、Jane's Defence Weekly、各国の防衛白書などを参考とした。

機種	分類	全幅	最大離陸重量	航続距離	運用高度	主な用途	備考（写真）
翼竜III	MALE	-	-	10,000km +	-	偵察・攻撃	翼竜III 写真：朝日新聞 
CH-4	MALE	18m	1,330kg	1,600-3,500km	5,300m	偵察・攻撃	CH-4 写真：YouTube 
BZK-005	MALE	19m	1,250kg	7,000km	8,000m	偵察	BZK-005 写真：航空自衛隊 
BZK-007	MALE	11m	700kg	推定値3,000km	7,500m	偵察	
TB-001(A,D)	MALE	20m	2,800kg (4,350kg)	6,000km	8,000m (9,500m)	偵察・攻撃	TB-001 写真：航空自衛隊 
WZ-7	HALE ステルス	23m	7,500kg	7,000km	18,000m	高高度偵察	
WL-10(WZ-10)	HALE ステルス	20m	3,200kg	推測値5,000km	15,000m	高高度 偵察・攻撃	WL-10 写真：航空自衛隊 
GJ-2	MALE	21m	4,200kg	6,400km	9,900m	偵察・攻撃	
GJ-11	ステルス	14m	10,000kg	4,000km	-	ステルス攻撃	

※HALE：高高度長時間滞空型

MALE：中高度長時間滞空型

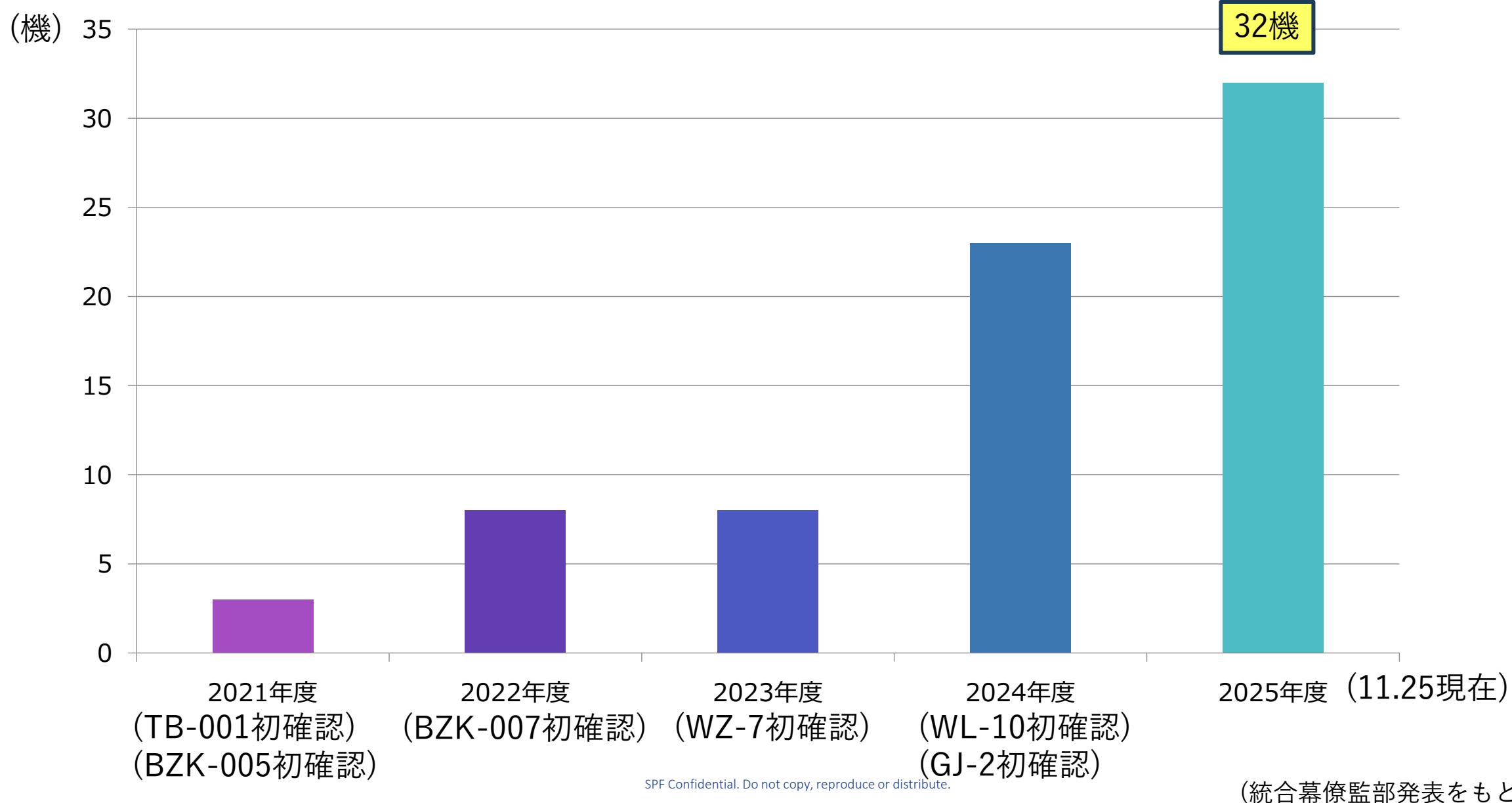
1. 中国の主要軍用無人航空機の装備の現状

実戦運用実績（対テロ作戦を中心とする）

国・地域	作 戰	使用機種	年	成 果
イラク	ISIL掃討	CH-4	2015年	260回攻撃
エジプト	シナイ半島	翼竜II	2017年	ISIL空爆
UAE	イエメン内戦	翼竜II	2018年	フーシ指導者殺害
サウジアラビア	イエメン内戦	CH-4、翼竜II	継続中	継続作戦
ナイジェリア	ボコ・ハラム	CH-3	2015-2016年	掃討作戦
パキスタン	対テロ作戦	ブラク (CH-3)	2015年	北ワジリストン

※ 防衛省・防衛研究所の公開資料、SIPRI、Jane's Defence Weekly、各国の防衛白書などを参考とした。

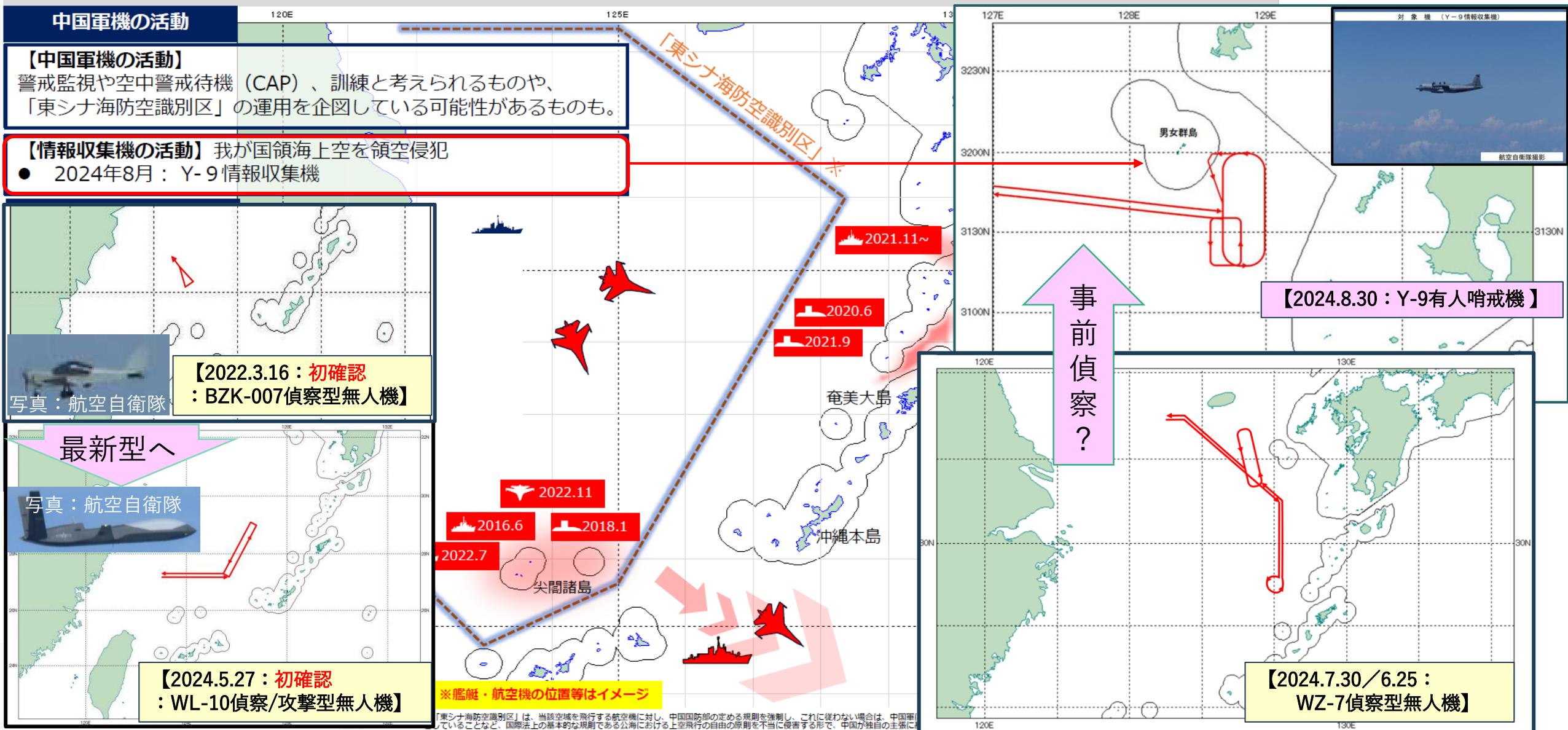
2. 中国軍用無人航空機の特異飛行の年度別推移 (2021-2025年度)



東シナ海での活動

(統合幕僚監部発表)

- 東シナ海においては、中国軍艦艇が継続的かつ活発に活動。尖閣諸島に近い海域で恒常に活動。
- 中国軍機も、尖閣諸島や沖縄本島をはじめとする、南西諸島により近接した空域で活発に活動。



2. 中国の主要軍用無人航空機による日本周辺での活動の現状

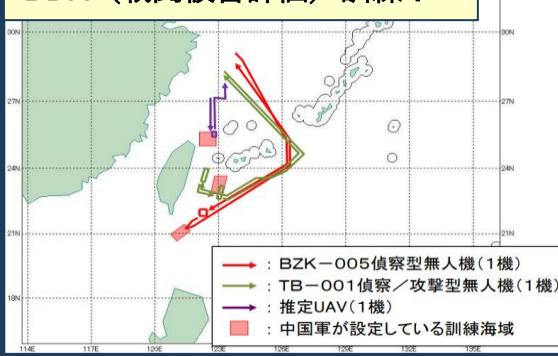
太平洋への進出

出典：防衛省H/P
(2025.10)

©2025 Yasuhiro Kawakami
(統合幕僚監部発表)

- わが国近海を航行しての中国海軍の戦闘艦艇による太平洋への進出は、高い頻度で継続。
- 航空戦力については、2017年以降、沖縄本島・宮古島間の空域の通過を伴う太平洋進出が一層活発。同空域を通過する軍用機（無人機を含む）の種類や飛行形態も多様化の傾向。

【2022.8.4】ペロシ議長訪台後
ミサイル弾着調査 +
BDA（戦闘被害評価）訓練？



中国軍機の太平洋進出

【沖縄本島-宮古島間を通過】

- 機種や飛行経路が多様化

Y-8早期警戒機／情報収集機／電子戦機、
Y-9情報収集機／哨戒機、Tu-154情報
収集機、H-6爆撃機、Su-30戦闘機、
TB-001偵察/攻撃型無人機、BZK-005
偵察型無人機、WZ-7偵察型無人機



【無人機の活動】

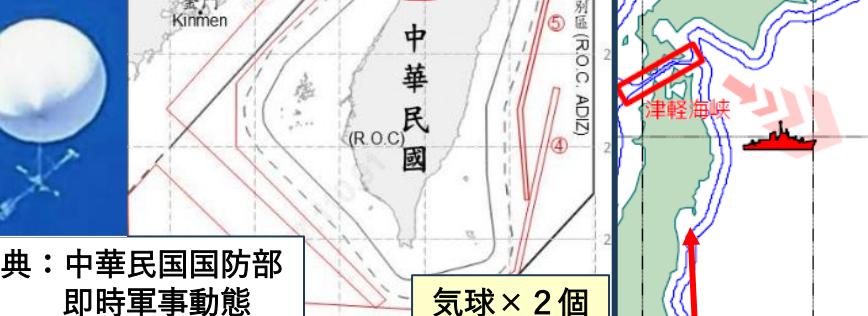
沖縄本島・宮古島間、与那国島・台湾間を通じて太平洋へ進出する例が頻繁に見られる。

【2025.3.17】

support aircraft / UAV
0600-2105時
無人機計3架次(3 sorties of UAV)
1140-1815時
空飘气球2颗(Balloon x 2)
(红圈虚线代表气球消失)
The red dashed line indicates the status of the balloon's disappearance

出典：中華民国国防部
即時軍事動態

気球×2個



【2021.8.24～26】
Y-9情報収集機・哨戒機各1機と共に太平洋へ

【2022.7.25】
TB-001単独で太平洋へ

【2023.4.28】
太平洋で空母「山東」と連携？

【2025】
偵察/偵察・攻撃無人機
進出回数：増

TB-001:最大24発ミサイル搭載可能

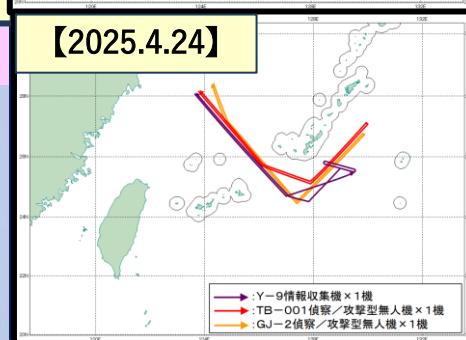
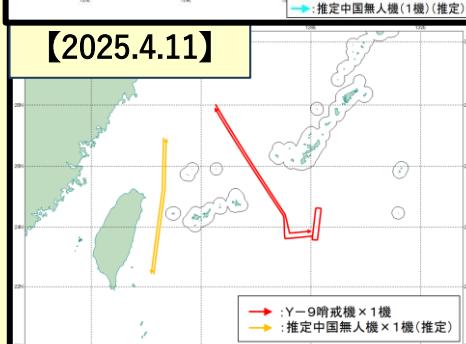
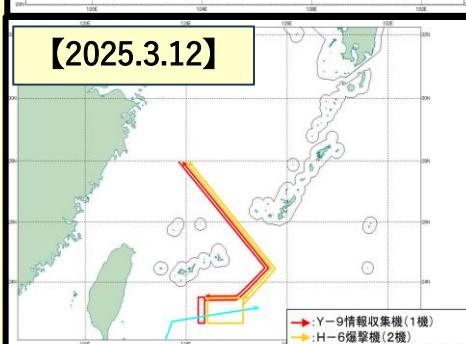
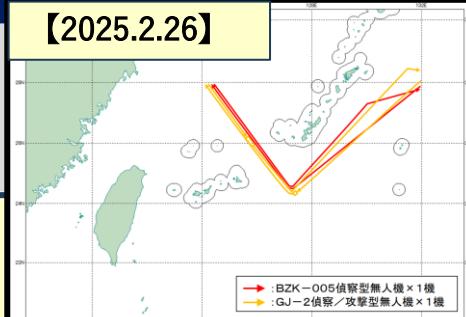


【2025.2.26】

【2025.3.12】

【2025.4.11】

【2025.4.24】



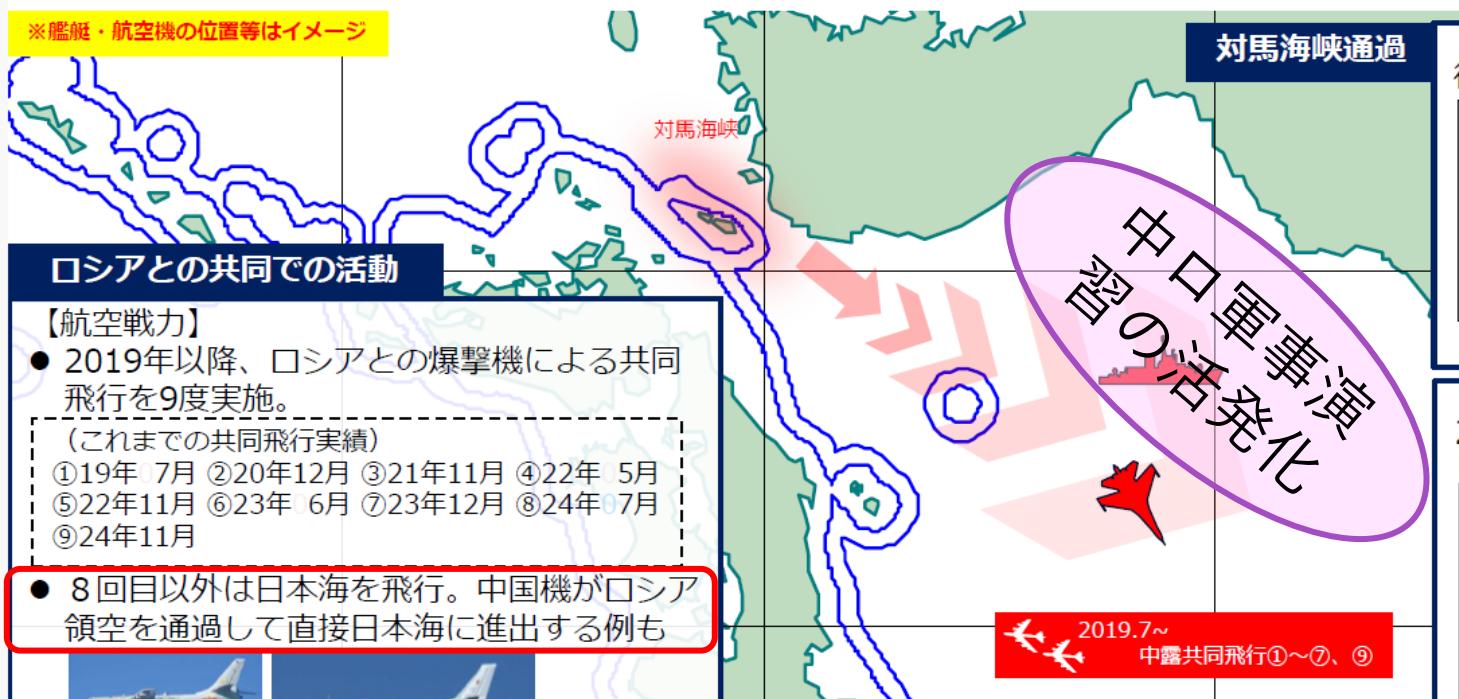
日本海での活動

防衛省H/P (2025.10)

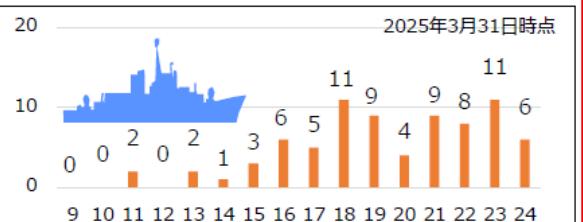
【2024.3.26】

- 日本海においては、海上戦力・航空戦力の活動が活発化。
- 海上戦力は、従来から訓練などの機会で日本海に進出。情報収集艦による対馬海峡の通過も頻繁に確認。
- 航空戦力は、2016年1月に中国軍機の対馬海峡通過を初めて確認して以降、日本海での活動が活発化。

※艦艇・航空機の位置等はイメージ



【海上戦力】
従来から訓練などの機会で日本海に進出



【航空戦力】
2016年1月に初めて対馬海峡通過を確認して以降、日本海での活動が活発化



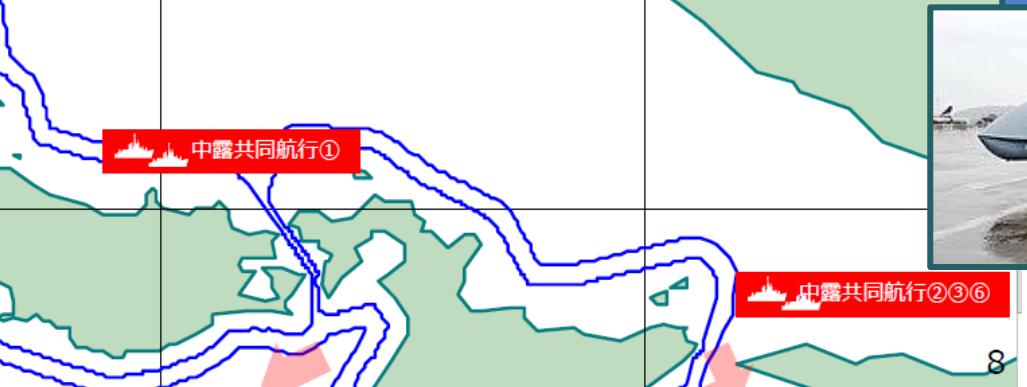
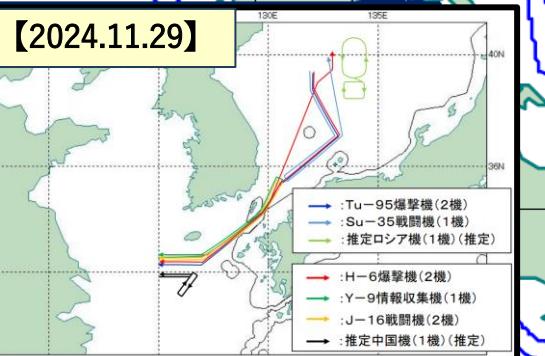
(偵察無人機WZ-7)



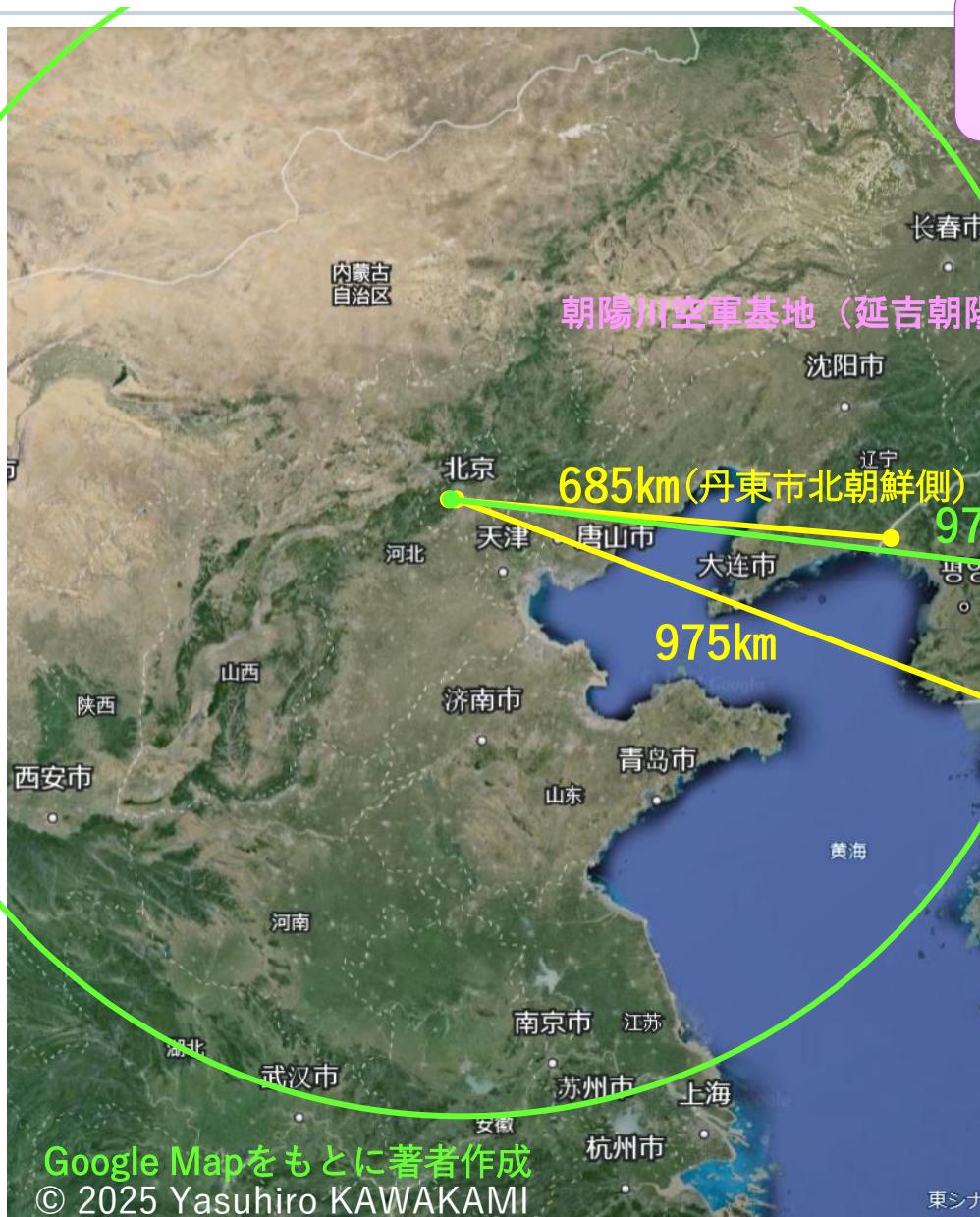
画像出典 : Wikipedia

- 【海上戦力】
- 2013年以降、中露共同演習「海上協力」が日本海において定期的に実施。
 - 2021年の「海上協力」後には初の中露共同航行を実施
 - 2025年8月、中露共同演習「海上協力」を実施。

【2024.11.29】



中国による日本海の第1列島線化の理由



北朝鮮またはロシア領空を飛行
しなければ日本海には出れず
(2024. 3.26)



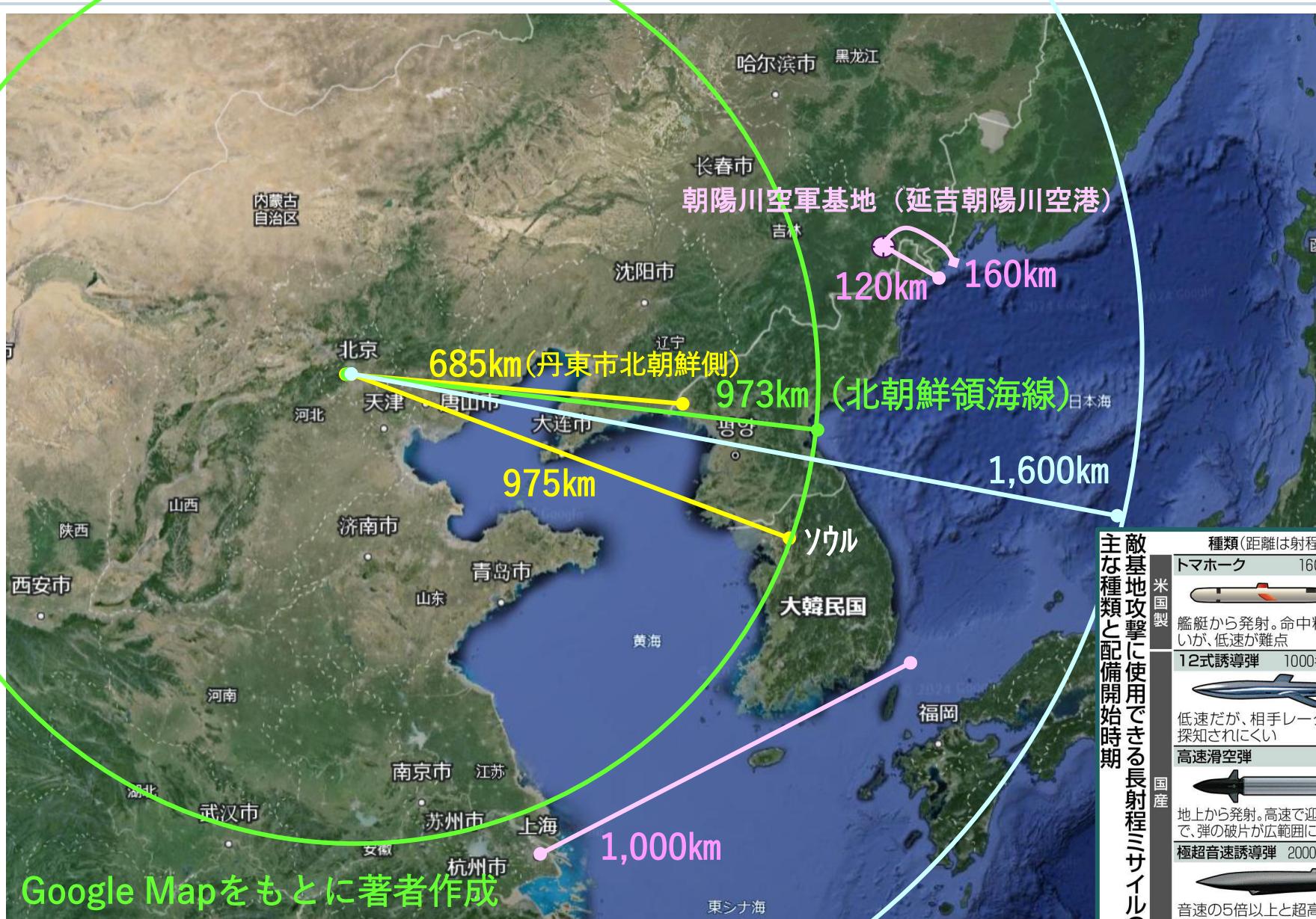
- 【2024.1現在】
- ・日本海での艦艇（71回）
 - ・航空機（27回）による活動を活発化
 - ・中日共同訓練・パトロール（艦艇・航空機）を活発化



- 実は・・・
- ・2017.11.11～：米空母（3隻）日本海で軍事演習
 - ・2017.12～：中国人民解放軍空軍（初）
H-6K爆撃機、Su-30戦闘機（初）

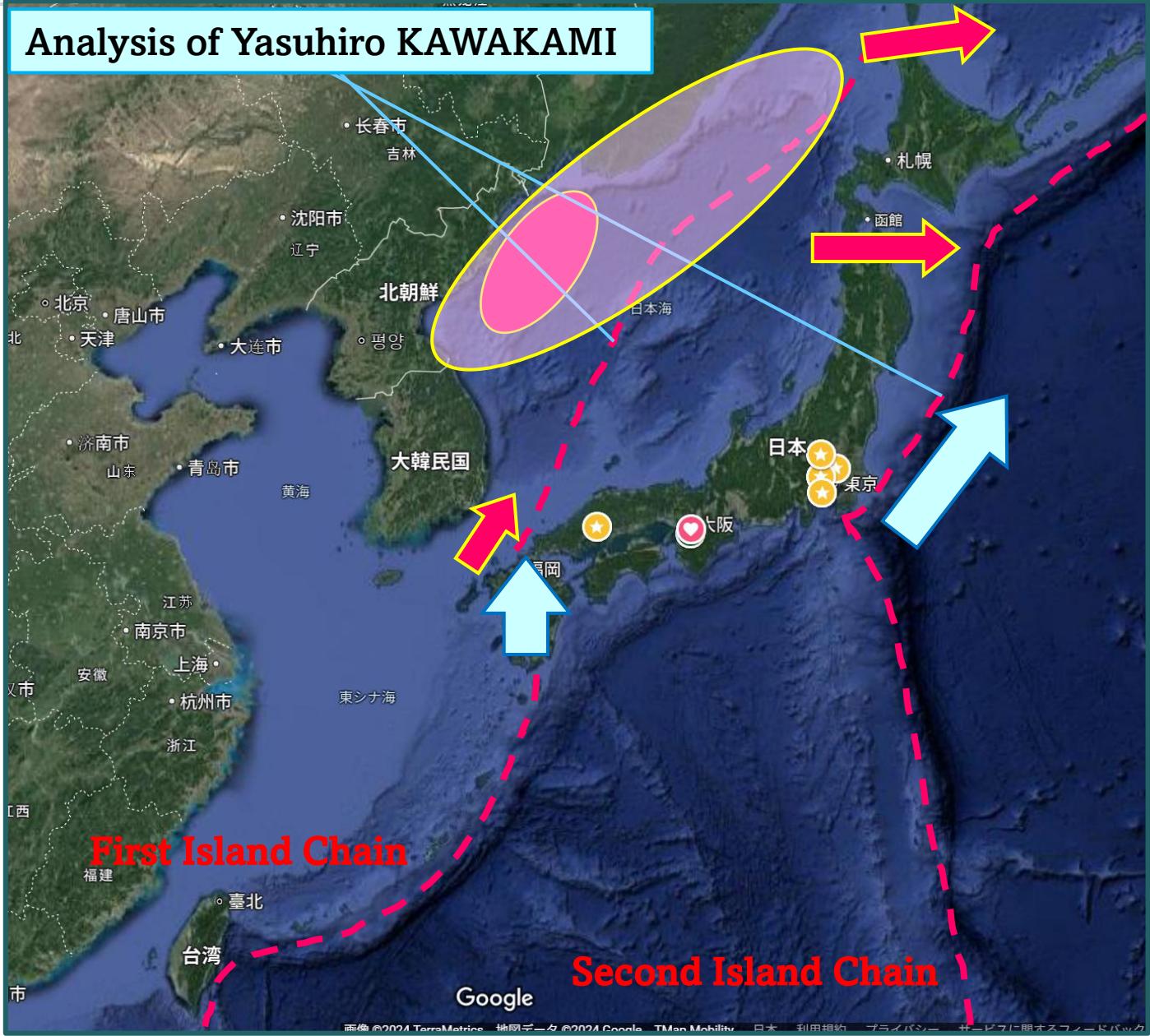
中国による日本海の第1列島線化

中国による日本海の第1列島線化の理由



日本に導入予定の巡航ミサイル「トマホーク」	
モデル	最新型のブロック5 艦艇から発射し、対地・対艦用
射程	1600km
速度	約920km/h(民間ジェット機と同じ速度)
取得数	最大400発
特徴	命中精度が高く、相手の迎撃を回避することも可能。低速なのが難点
米軍の使用実績	<p>湾岸戦争(1991年) 開戦最初の一環で122発をイラク中心部のバグダッドに発射</p> <p>イラク戦争(2003年) 開戦初日にバグダッド周辺に40発を発射し、開戦から2週間余で700発以上使用されたとされる</p>
※3月1日の参院予算委員会における政府答弁などを基に作成	
出典：東京新聞	
種類(距離は射程)	2025年度 > 26 > 27 > 28年度以降 > 30年代
トマホーク	1600キロ 艦艇から発射。命中精度高いが、低速が難点 旧型「ブロック4」 前倒し配備 最新型「ブロック5」
12式誘導弾	1000キロ超 地上発射型 艦艇発射型 戦闘機発射型
高速滑空弾	地上から発射。高速で迎撃困難で、弾の破片が広範囲に飛散 早期装備型(数百キロ) 能力向上型(2000キロ超)
極超音速誘導弾	2000キロ超 地上発射型 前倒し配備を検討中 潜航艇発射型

中国による日本海の第1列島線化



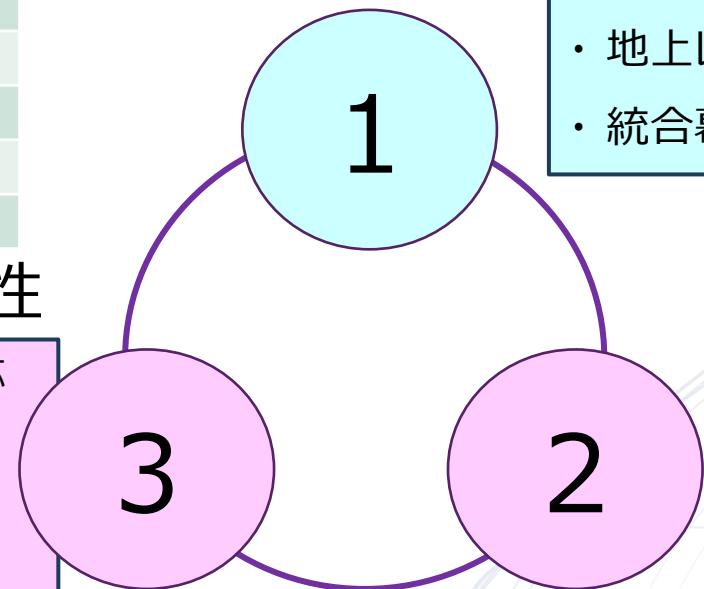
3. 日本の現対応状況と課題

資料名	発行年月
令和7年版防衛白書	2025年
令和8年度防衛予算概算要求の概要	2025年8月
中国情勢(東シナ海・太平洋・日本海)	2025年10月
南シナ海情勢	2025年4月
国家防衛戦略	2022年12月
防衛力整備計画	2022年12月
河上康博IINA論考	~2025年6月

対処の非効率性

- 高価な有人戦闘機による長時間の対応
- パイロット・整備員の負担増大
- 燃料・部品の消耗
- 費用対効果の不均衡
(安価な無人機 vs 高価な有人機)
- 常態化への懸念:
 - 活動頻度の増加により「新常態」化
 - スクランブル対応能力の限界
 - 有事における対処能力の低下リスク

現在の対応



- 全ての事案で航空自衛隊南西航空方面隊の戦闘機が緊急発進(スクランブル)
- F-15J、F-2、F-35Aなどの戦闘機による目視確認・追尾
- 地上レーダー(FPS-5、FPS-7等)による探知・追尾
- 統合幕僚監部による迅速な情報公開

探知の困難性

- 小型・低速無人機は既存レーダーでの探知が困難
- 機種特定ができない事案が増加
- 低高度飛行時の探知空白域の存在

3. 日本の今後の対応

■ 無人アセット防衛能力の構築

- 「無人アセットによる多層的沿岸防衛体制【SHIELD】」を構築（ SHIELD = Synchronized, Hybrid, Integrated and Enhanced Littoral Defense）
 - 令和 8 年度概算要求において1,287億円計上
 - 2027年度中（～2028.3）にSHIELDを構築
 - 滞空型 UAV「MQ – 9 B(シガーディアン)」（4 機）の取得等（770億円）
 - 目標情報収集用無人機の取得等(20億円)



■ 統合防空ミサイル防衛能力

- センサー・ネットワーク等の強化（635億円）



■ 指揮統制・情報関連機能（約5,399億円）

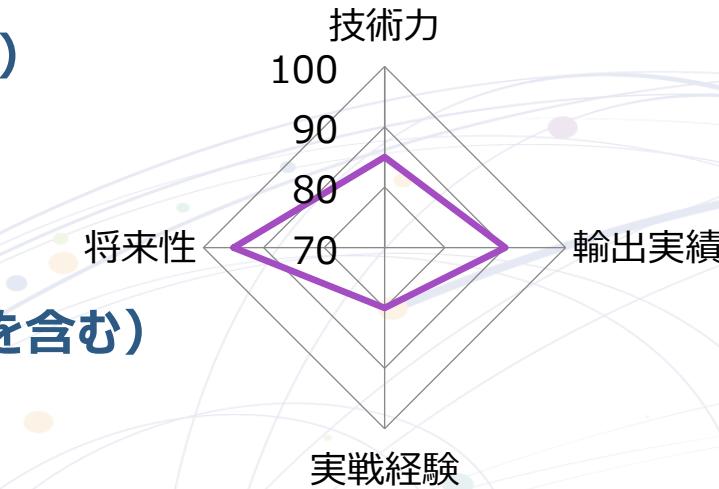
- 日本周辺における軍事動向等を常時継続的に把握、リアルタイムでの情報共有、抗たん性あるネットワーク

4. まとめ（中国の軍用無人航空機の現状）

■ 脅威の増大

- 性能の向上（速力・航続距離・高度など）
- 偵察型のみならず**攻撃型無人機の開発・戦力化**（弾薬搭載量の増大）

AIによる中国無人機の総合評価



■ 活動の活発化

- 活動の活発化（飛行回数の増大：ほぼ毎月飛行）
- 偵察型から偵察型・偵察/攻撃型混用への**運用強化**（新型機の活動を含む）

■ 活動範囲の拡大

- 東シナ海では偵察型・偵察/攻撃型が単独活動
- 太平洋では有人機と同行・同調、単独飛行、また偵察型と偵察/攻撃型など活動の多様化 **[AI化]**
(与那国島－台湾間ルートの常態化)
- 日本海では大陸から直接単独進入

■ 軍用無人航空機運用母艦の新造

- ドローン空母（艦艇・無人機）開発
- 076型強襲揚陸艦「四川」の活用
(電磁カタパルト：無人機（スウォーム）仕様？)



076型強襲揚陸艦
写真：Wikipedia

無人空母機「九天」写真：Weibo

4. まとめ（日本の対応と提言）

■ 「無人アセットによる多層的沿岸防衛体制【SHIELD】」を構築 (SHIELD = Synchronized, Hybrid, Integrated and Enhanced Littoral Defense)

- 令和8年度概算要求において1,287億円計上、2027年度中（～2028.3）にSHIELDを構築
- 【提言】スウォーム攻撃（10機～数百機）への対応体制の構築 【量への対応】
- 【提言】無人機に対する無人機対応能力
(類・識別・即時判断、AIを含むC-UAS: Counter-UAS技術の開発など) の確立 【質への対応】
- 【提言】持続性・強靭性の確保
(例：①レーダーサイトを含む機動展開前進基地作戦（EABO）化、
②弾薬・部品、官民協力（デュアルユース）、③民活を含む人材育成)

■ 監視態勢の向上（統合防空ミサイル防衛能力 + 指揮統制・情報関連機能）

- AI化を含む

■ 同盟国・同志国との連携の強化

- 【提言】情報共有（中国の軍用無人航空機の技術開発+運用パターン）、AI化
- 【提言】技術開発（価値観を共有する各国と連携した共同開発）

中国軍用無人航空機活動 の現状と今後の見積り

ご清聴ありがとうございました。

笹川平和財団

日米・安全保障研究ユニット総括・交流グループ長
兼主任研究員

河 上 康 博